



交流会で22日の委嘱状が交付され、具志堅さんは「テレビを通じて、世界に石垣



たい」と夢をふくらませた。

で、先生たちに参加を呼びかけた。全員完走に驚いた。とできてよかった。沿道でも感謝している」と



しかし関係府省でのく、米メディアは「奇協議では「額の問題で跡の赤ちゃん」と伝えはなく、因果関係のなっている。

来る2月24日(火)、「パンドラの箱掲載拒否訴訟」の第五回公判が那覇地裁で行われる。

この訴訟はドキュメンタリー作家上原正稔氏が、R紙の「言論封殺」を訴えるという前代未聞の裁判であるにも関わらず、これを知る県民はほとんどいない。沖繩の2大紙、R紙とO紙が、自分たちにとって「不都合な真実」は、決して報道することはないからである。

「上原氏怒りの記者会見」

ちょうど一年前の1月31日。県庁記者会見室でドキュメンタリー作家上原正稔氏が記者会見を行った。その日の午前中に、上原氏はR紙に対する損害賠償訴訟を那覇地裁に起こし、それを受けての会見であった。代理人の徳永信一弁護士が訴訟の概略を説明した後、マイクに向かって上原氏は、開口一番沖繩戦時中慶良間島で戦隊長を務めた赤松嘉次、梅沢裕両氏に対して「大変な迷惑を掛けたい。ごめんなさい。許してください。そして同時にありがとうと言いたい」と詫言の言葉を述べ、両隊長による「集団自決の命令がな

「星」 そうですね。現在でも意味では統制されているわけですからね。抜粋引用する。

「星」 もう完全に右も左も統制です。僕はR紙のM記者たちに「パンドラの箱」の掲載をストップさせられた。怒鳴りつけてやった。「君らは表現の自由を知ってるか」ってね。しかし動じる様子もなかった。連載は二〇〇七年四月から四ヶ月も中断した。

「星」 社の方針に反するということだろうね。それはまたその人たちが統制の枠の中にいるってことだが、意識してないかもしれない。

「上原」 彼らはずっと沖繩の知識人、自分たちは文化人だと思っ込んでいますよ。それで自分たちの発言や行動はすべて正しいと思っているわけです。

ドキュメンタリー作家上原政稔の挑戦！

～R紙の言論封殺との戦い～ (上) 江崎 孝

いいと思ってる。だから、僕が本当のことを書くことしたら、もう読みもしないうちからストップかけるわけです。これはR紙の編集方針に反するからといってね。僕は一回にわたって四人組の記者から吊し上げられ、連載を中止させられた。一番腹が立ったのはM記者だったが、彼も新聞社をバックに空威張りしたのにはすぎない。彼等も統制のオリの中にいるわけですよ。(2009年5月、『うらそえ文藝』(第14号))

「連載掲載拒否」本紙を提訴

「2007年5月、沖繩」

「各市民団体、労働団体の抗議声明が連日の紙面を飾る騒然とした状況の中、私はドキュメンタリー作家の上原正稔氏がR紙の夕刊に連載していた沖繩戦記「パンドラの箱を開ける時」を、深い興味を持って愛読していた。

「慶良間」

「(6)につづく」